注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
今日も平和とカオス？の魔界物語

【作者名】
Ｍｉｎｏｓａｗａ

【あらすじ】
ここは魔界、その魔界では王様つまり魔王が二人いる。
Ｍｉｎｏｓａｗａのオリジナルキャラ達が大暴れ!?
この物語は二人の魔王と１人の護衛隊長の笑い要素は当たり前、涙の要素はたまにあり、ラブラブ要素はありまくり？のお話の始まり始まり・・・

※小説家になろうとマルチ投稿です。

第1話

ここはこの世とあの世の狭間にあり、様々な種族が住んでいる異世界『魔界』

その魔界の中心にそびえ立つ城『魔帝城』・・・そこには魔界の頂点に立つ存在、魔王が住んでいる。

この物語は1人の魔王と一人の魔王の弟で騎士団長と一人の親衛隊隊長のちょっと変わった?日々のお話である。

魔帝城・王室の間

「・・・では良い返事をお待ちしております」

そう言ってどこぞの国の遣いが王室を後にした。

「ミノル様…書状の内容は?」

「ああ…またと言うか何と言うか…」

少し長めの髪型で黒い髪色、２０歳前後の男が玉座の間の椅子に座って書状を手にして溜め息混じりに言った。

この男こそ魔界の王でありこの物語の主人公の1人ミノルである。

「と・・・申しますと」

「また領地拡大と武器などの貯蔵増大の件だ…しかもこれで三度目、それにオーク族のこの書状の内容はまともだが…理由があいまいな所が多い。しかもよく読めば俺はオークの存在を絶対的に大切にしているという内容もある。もしこれの内容を認めればオーク＝魔王公認の正しい存在とされちまう」

「なんと!オーク族め・・・魔王様の地位と名声を利用とするとは…先々代の魔王様に拾われ同然の種族が・・・」

大臣は頭に血が上りそうな勢いで言った。

「落ち着け大臣、確かに怒る理由はわかるが怒っていても何も始まらない、そうだろ?」

「は・・・はい、失礼しました…では待たせている遣いには何と?」

「理由をはっきり正確に書くこと、そして無駄なことは書かない、もしもまた同じような事を書いてきたらこの件は永久に無かった事にするからそのつもりでと伝えて来い」

「わかりました・・・ではその事を書に書き、オークの遣いに渡していきます」

そう言って大臣は王室の間を出た。

「はぁ～無駄に時間掛かったな・・・」

時計を見て立ち上がるミノル。

「じゃあ俺は例の場所に行くから、何かあったら知らせてくれ」

「承知しました」

女官そう伝えてミノルは王室の間を出て、ある場所に向かっていった。

魔帝城・鍛練場

ここは魔帝城より少し離れた場所に大きい施設がある。そこに魔界各地の種族が集った騎士団、魔帝騎士団。

それは魔界の他にこの世とあの世を取り締まる組織である。

『はっ!!せい!!はっ!!』

木刀で素振りをする騎士団の兵士達。それを前で兵士達を見ている1人の男がいた。明るい金髪ちょいクセのあるショートの髪型、白い鎧を身に纏っていた。

「よし!!素振り終了!・みんな、今日もお疲れ様。今日はゆっくり休んで明日も頑張るように」

「はい!!ありがとうございました」

そう言って兵士達は木刀を入れていた箱に入れ、鍛錬場を出始めた。

「ふぅ～今日も終わった…」

アキラ汗をタオルで拭きながら鍛錬場を出ようとしたら…

「あの!!アキラ団長!!」

アキラの前に制服姿の少女達数人やって来た。

「君達は…女子寮の訓練生だね」

「はい!!あの…これ！よかったら…」

少女達は持っていた小袋をアキラに渡した。

中身は…クッキーやチョコレートなどの菓子類だった。

「ありがとう…頂くよ」

「ありがとうございます!!」

そう言って少女達は喜びながら走っていった。

「モテモテですね…」

「ははは・・・でも、あいつには…」

「はい、黙っておきます！」

「頼んだよ？」

笑顔で答えたアキラは鍛錬場を後にし、ある場所に向かった。

魔帝城　地下鍛錬場

ここは…魔帝騎士団の様々な分隊が特訓する場所である。そしてここはある部隊の採石場でもあった。

「うおりやぁー!!」

ドオオン!!

1人の男が巨大な岩を大きいハンマーを使って砕き、大きい轟音が響いた。

「おおー！」

周りの兵士達が歓喜の声を上げた。

身長は少し高めで茶髪のショートの男がハンマーを置いた。

この男がミノル・アキラの親衛隊隊長であり、魔帝騎士団・ターゲットの奪取・破壊を専門とした部隊『デストロイジュエルズ』の隊長、ヤマトである。

「流石ヤマト隊長！」

「真似できないっすよ！」

「いやいや…そんな事はないよ」

そう言ってヤマトはハンマーを置いて、時計を見た。

『そろそろかな？』

ヤマトがそう思った時だった。

「お兄ちゃーん」

ヤマトと同じ茶髪でツインテールの女の子が走ってきて、ヤマトに抱きついた。

「サヤカ!!ちょ!?離れて恥ずかしい」

「いいじゃん！別に～お兄ちゃんと私の仲じゃない～」

「ちょ！胸が当たってるから！」

「わざとだよ～ｗｗｗ」

すると、その後ろから2人と同じ茶髪でロングヘアーの美人の女性が歩いてきた。

「お疲れ様ヤマト、はい…」

そう言ってヤマトにタオルを渡す彼女はヤマトとサヤカの姉、シズカである。

「ありがとう、姉さん」

「どういたしまして」

「お兄ちゃん！はい水筒」

「ありがとうサヤカ」

彼女達2人を見て兵士達はメロメロになっていた。

「やっぱ綺麗だな～シズカさんって」

「文武両道で容姿端麗、いや～本当に綺麗だ」

「サヤカちゃんなんか魔界の学校でアイドル的存在だもんな～」

「しかも魔法の試験はトップクラスの腕前、言うことなしだよ」

整列しながら二人の話をするヤマトの部下の兵士達。

「よし!!今日は解散」

『ありがとうございました!!』

兵士達は地下鍛錬場を後にした。

「さて…と、2人は来る？たぶんあの二人は来てると思うけど…」

「行く行く!!ねぇお姉ちゃん」

「ええ…」

「じゃあ待ってて着替えて支度するから」

そう言ってヤマトはシャワー室に向かおうとした。

「私も汗掻いたから一緒に…」

「ダメだ！」

さやかがヤマトの後について行くようにシャワー室に入ろうとしたが、ヤマトが追い出した。

「いいじゃん！背中流すから～」

「それはお風呂のときだろ！」

魔帝城・シークレットティールーム

ここは一部の者しか知らない秘密の茶室である。

「よっ！」

「やあ」

アキラがティールームに入るとカップをテーブルの上に置いているミノルがいた。

「また訓練生の女子に貰ったな？色男の騎士団長さん」

「何度も聞いたよその台詞、悔しいの？」

「まさか…まぁ～ちょうど茶菓子が必要なところだったし」

アキラは貰った菓子類をテーブルの上に置き、椅子に座った。

「今日はコーヒーと紅茶、どれにする？」

「じゃあ紅茶で…」

ミノルは紅茶の茶葉を選んでいると…

「来てましたか」

ヤマトとサヤカとシズカがプライベートティールームにやって来た。

「ミノル様、アキラ様こんにちわ！」

「おーサヤカちゃん！」

「シズカさんもどうぞ…」

そう言って椅子を引くアキラ。

「ありがとう…『アキラ君』」

「『君』だと何か恥ずかしいですよ」

「ああ!!すみませんアキラ様」

「いえいえ…謝らなくても」

そのやり取りを見ていたミノルがニヤニヤしていた。

「流石魔界一のイケメン騎士団長、早速女1人落とそうとしてる」

「そんな事してない！兄さんの茶菓子なし！」

「あはは…ゴメンゴメン」

そう言ってミノルは紅茶が入っているティーポットを持ち、みんなのカップに注いだ。

その後、今日あった事を話しながら一同は楽しんだ。

今日も魔界は平和である。

第2話

魔王の仕事は主に書類整理や会議、そして…たまに国々の視察と食事もある。

「天地国に行くのか？」

「はい…今日の夜に闇魔大王様とロイヤルヘブンズホテルでディナーの予定が入っております」

「ロイヤルヘブンズホテルか…」

王室の間にてミノルは今日の予定を女官に聞いていた。

「はぁ～あいつに会うのか…嫌な予感しかない…」

少しため息をこぼして考えこんだ。

「今日アキラは一日ナイトオブクイーンズと合同演習だし、ヤマトもそこに行ってるから…今日は俺だけか…」

さらに大きくため息をこぼすミノル。

「しょうがない…支度するか…」

「では、お着替えを…」

そう言ってミノルは王室の間を出て、着替えをしに自分の部屋に向かっていった。

場所が変わってここは魔帝城から少し離れた場所にある巨大闘技場、ここで魔帝騎士団と女性だけが集めた騎士団、ナイトオブクイーンズと合同演習が行われていた。

「おい！相手が女だからといって手を抜くんじゃない！」

赤い鎧を身に纏って仁王立ちをしている一人の美女の騎士がステージ上で女騎士に倒される騎士の男に怒鳴っていた。

「全く…近頃の男は…」

「すまないな…今回は新人を多く参加させたから…」

美女の騎士の隣に白い鎧を身に纏って鞘に収まっている愛剣・雷帝剣を持っているアキラが現れた。

「アキラ様、新人がいるならちゃんと報告をお願いします」

少し鋭い目でアキラを見るレオナ

「報告したらレオナ、君の男嫌いと言う悪い癖が出まくるからあえて言わなかった」

アキラに事実を言われて、少し黙り込むレオナ。

「それはそうとアキラ様、先日うちの所の訓練生に菓子を快く貰った

と聞いていますが…」

「何のことー『棒読み』…」

目線を逸らしながら棒読みで言い返すアキラ。

「まったく…騎士団長ともあろうお方が、女子にデレデレするなど」

「おや？男を嫌っていたナイトオブクイーンズの隊長が嫉妬かな？」

「嫉妬などありえん！むしろ軟弱な男などに…」

そう言ってその場から離れるレオナ。

「それじゃあ僕もその軟弱な方に入るのかな？」

「いえ…あなたは…」

アキラの言葉に返す言葉が見つからないレオナにアキラが近づいた。

「僕は嬉しいよ？強くて綺麗な君に嫉妬されるなんてね…」

「／／／／／!?」

アキラの一言に顔を少し赤らめるレオナは颯爽とアキラから離れた。

『もう…何なのだ私は…』

走りながら彼女はアキラの一言が中々離れなかった。

「やりますね～アキラ様」

横から黄色の鎧を着たヤマトがラヴァージを持ってやって来た。

「ヤマトか、何のようだ？」

「よかったら一戦交えません？」

「ほぅ？ずいぶんとストレートな誘いだな？」

少し笑みをこぼしながらヤマトを見るアキラ。

「だけどそういう誘いも悪くない」

2人は横に並んで中央にあるステージに立った。

『おい！アキラ団長とヤマト様が戦うぜ！』

『ヤマトの兄貴が！』

『早く行きましょう！ベストポジション取らなきゃ』

ステージの上にいた男女の兵士たちが早々とステージから離れた。

「それじゃあ本気で行きますよ？」

「ああ…こちらも全力で行くぞ！」

お互い武器を構え、アキラには青いオーラ・ヤマトには金色のオーラが浮き上がった。

「「はあぁぁぁぁ!!」」

ヤマトのラヴァージがハンマーモードから大型の剣に模ったブレイドモードに変形し、2人の武器が激突した。

一方、リムジンに乗っている黒のタキシード姿のミノルがやって来たのは、あの世。天国と地獄の境界にある天地国に来た。

ここは古くから魔界の文化で栄えている鬼の国で、死者を天国行きか地獄行きかを決定する鬼の種族の長、閻魔大王が王として君臨しているのだ。

「ミノル様、到着いたしました」

「ああ…」

ミノルがディナーをするロイヤルヘブンズホテルはこの天地国で有名なホテルで魔界も含め様々な国で高い評価を受けている5つ星の超高層ホテルである。

「おお~ミノル、来たか!」

ミノルがホテルに入るとホテルのオーナーと話していた一人の男がミノルの前に駆け付けた。

「元気そうだな、閻魔」

このグレーのタキシード姿の男こそ天地国の国王で鬼一族の長、閻

魔大王である。

「ハッハッハ!!お前も元気そうだな、ミノル」

高笑いしてミノルの肩を叩く閻魔に溜め息をこぼすミノル。

「お前…一応地獄の大王なんだから少しは立場ってやつを…」

「わかっておる！俺はちゃんと理解しておる」

「やれやれ…」

ミノルはため息をこぼしながら、閻魔と共にＶＩＰ専用エレベーターに乗り込んだ。

「なあ閻魔」

「何だ？ミノル」

ＶＩＰ専用エレベーター内でミノルが閻魔にある事を聞いてきた。

「アイツはいないよな？」

「アイツ？」

「わかってるくせに…」

「何がだ？」

「・・・・」

ミノルは閻魔に問いかけるが段々小声になってきて、最終的に無言になってしまった。

「お前の口からじゃないと言わんぞ？『ニヤニヤ』」

「テメェ…ああそうだよ！アイツだよ！お前が早くにデキ婚して出来た成長が早くて老化が遅い鬼族の女の子で親バカのお前の娘のマリだ!!」

大きい声で閻魔の娘を叫ぶミノルに閻魔のニヤニヤが止まらなかった。

「何だやっぱりマリを狙っていたのか？結婚するなら歴史に残るような最高の式を用意するが？『ニヤニヤｗｗｗ』」

「違うわ!?お前と俺の事になるといっつもアイツが付いて来るんだよ！」

「でも満更でもないだろ？」

「それはそうだけど…じゃなくって！お前はいいのかよ！長寿で古い親友の俺にそう簡単に娘をもらっていいのか？娘の気持ちとか意見とか？」

「俺とマリは大丈夫だし意見も合致してる、結婚ＯＫという答えが…」

「ｏｒｚ…」

これ以上何を言っても無駄だと感じたミノルは頭を抱えた。

「んで…話は戻るけど、マリは来てんのか？」

「ああ…マリか？マリなら…」

『ポーン』

閻魔が言うとほぼ同時に、展望レストランに到着し、扉が開いた。

すると、扉の前に1人の女性が立っていた。

白のディナー・ドレスを身に着けている黒髪ロングヘアーの女性を見て、ミノルは驚きを隠せなかった。

「パーフェクトな身なりでここに来ているぞ！って言おうと思ったが、遅かったか？ハッハッハ!!」

「お…お…」

俯きながらミノルがぶるぶる振るえ、そして。

「遅いわボゲがぁ!!」

高笑いしている閻魔に顔を赤くし、涙を浮かべながら彼の胸倉を掴んだ。

「ワザとだな！ワザと時間稼いだな！何とか言えゴラァ!!!」

「ハッハッハ！一瞬マリのドレス姿見て見とれていただろう？」

「誰が！見とれてなんか…」

段々返す言葉が見つからなくなってきたミノルはチラッ×2とマ

リを見ていた。すると、閻魔の娘マリがミノルに近づいてきた。

「ミノル様、お久しぶりでございます」

「ああ…久しぶりだな」

丁寧に挨拶をしたマリに、つい見とれてしまったミノル。

「それじゃあ…食事に『プルル・・・』ん、失礼」

レストランで椅子に座った時、閻魔のスマホから着信が入り、席をはずした。

「ミノル様、相変わらずお変わりなく…」

「ああ…お前も…」

ミノルは気にしていた。何故なら…彼女の胸が大きく、某牛丼チェーン店でサイズで言ったら大盛と特盛の間に当たるサイズであり、谷間が目に入ってしまうのだ。

『アイツ見ないうちに大胆なドレス着てきてるな…昔は地味なものばかりだったけど…って何考えてんだ俺は!?』

心の中で葛藤しているミノルを見て、少し微笑むマリ。そこへ閻魔が慌てた様子で戻ってきた。

「ミノルすまん！向こうでトラブルが発生したらしい」

「・・・・・」

「食事はマリと食べてくれ」

「・・・・・」

閻魔の言葉に無言で聞くミノル。

「ああ…それと…」

「お前の次の台詞は…」

「「折角だからここに泊まったらどうだ?」だ!」

「あ…」

ミノルは閻魔の言う台詞を同時に言って、閻魔が不味いと感じた。

「マリ…ちょっとこいつと一緒に席外すから、すぐに戻るから」

「は…はい」

そう言ってミノルは閻魔の腕を引っ張って、レストランの前に連れて行った。

「お前…最初から部屋とったな?しかもお前の事だ、このホテルのロイヤルスイートを用意している!違うか?」

「さすがミノル、その通りだ」

「それじゃあトラブルの電話は嘘だな!?」

「いいや…電話は本当だ。本来だったらお前ら二人の動向を監視しようかと思ったんだが…」

「覗きかよ…悪趣味な」

「ちょっと待て」

そう言って席に戻ろうと歩き出そうとしたミノルに呼び止める閻魔。

「これを使うといい…」

そう言って閻魔がミノルに渡した物は『絶倫大魔王〜一発必中〜』という薬だった。

「孫の顔を期待してるぞ！」

「こんのボゲが!!」

「んご!!」

健やかな笑顔で爆弾発言の閻魔に思いっきり頭を殴った。

「どんだけアッチ方面に期待高まってんだ！お前ホントに娘の親か!!」

「俺はあいつの事を思ってだな…」

「ほぼお前の考えじゃねえか!!」

閻魔の気が抜けた発言につっ込みを連発するミノル。

「とにかくコレは返す！行くならさっさと行け！」

そう言ってミノルは薬を闇魔に投げ返した。

「だけどお言葉に甘えて５つ星ホテルに泊まるよ…お前が用意した部屋で…」

「そうか！コレはその部屋のカードキーだ…部屋の場所はあのＶＩＰエレベーターにカードキーを差し込めば行けるから、それじゃあごゆっくりｗｗｗ」

「最後のｗｗｗやめろ!!」

闇魔はミノルに赤いカードを渡し、ＶＩＰエレベーターに入って下へ降りていった。

結局ミノルはマリと2人でディナーする事となった。

メインディッシュの肉料理にナイフで切っていたミノルにマリは口を開いた。

「ミノル様、アキラ様とヤマト様はお元気ですか？」

「ああ…あの2人は元気だ、今はナイトオブクイーンズと合同演習に行ってる」

「レオナさんがいるところと…」

「お前はどうなんだ？」

そう言いながら肉を食べるミノル。

「もちろん花嫁修業です」

「うっ…」

マリの発言に肉を噛むのをやめるミノル。

「どうしました？」

「（ゴックン）…お前は相変わらずだな…んで、一応聞くけどどんな内容だ？」

「そうですね…料理全般に掃除、そして…」

するとマリが少し顔を赤くして言うのをやめた。

「そして、何だ？」

そう言って、ワインを飲むミノル。

「殿方を喜ばす夜の○○○（ピーー）テクニックを…」

「!?!?!?」

マリの大胆発言に口の中に含んでいたワインを噎せて椅子から転ぶミノル。

「おまっ！少しは自重できないのか…」

顔を赤らめながらミノルが椅子から這い上がるように立ち上がった。

「でも…少し大胆に責めて相手の反応を楽しめと教えられたものでして…」

「その何とかテクニックは誰に教わったんだ？」

「〇〇〇（ピーー）テクニックをですか？」

「テクニックの前は言わんでいい！んで誰が」

「城で母と夜人国（よじんぞく）の王妃様を講師に私を含めたまだその知識に疎い若いサキュバス族を生徒で、題して『男を〇〇〇で落とせ！夜の運動講演会』を…」

「百パー18禁レベルの講演会だよな！しかも面子が夜の情事のスペシャリストばかりじゃねえか！って俺も何言ってんだ!?」

あまりの出来事に自らつっ込みを入れてしまったミノルであった。

ディナーを終え、ＶＩＰエレベーターに乗った。

「そういえばこのカードを使うんだっけな」

上のロイヤルスイートルームに向かおうと、閻魔からもらったカードキーを取り出した。

「これか？」

ボタンの上にカードを差し込む場所があり、早速使ってみるのだが…

『ビーーーーレッドを認識しましたが、ブルーが認識できておりません』

「あれ？」

カードを差し込んだがエラーのような音が鳴り、ミノルにはわからなかった。

「ブルー？どうなってんだ？」

「どうしました？ミノル様」

ミノルの様子にマリがやって来た。

「ああ…カードを入れたんだけど変なんだ…」

するとマリが持っていたポーチを開けて取り出したのは、ミノルと色違いの青いカードだった。

「ちょっと待ってください」

そう言って彼女はミノルの反対側に立って、同じ場所にカードを差し込むと…

『レッド・ブルー…カード承認しました』

アナウンスが言うとエレベーターの扉が閉まり、エレベーターが動き始めた。

「えっ？どゆ事？」

「フフフ…ミノル様、このホテルのロイヤルスイートをご存じないんですか？」

「ああ…ここに来たのは初めてだから…」

「その部屋は恋人同士しか使えないんです」

「は？」

マリの言葉に驚きを隠せないミノル。

「父が母との部屋を作ろうと、この部屋が出来たんです」

「ちょっと待て…もしかして俺はお前と…」

「はい！一緒の部屋で泊まるんです」

そして彼女の言葉と同時にエレベーターが止まり、扉が開いて一本道の廊下を歩いて扉を開いた。

そこは広々とした部屋でその奥には夜景が一望できる大きな窓、様々な酒が置いてあるバースタイルのカウンターが設けてあるまさに豪華絢爛な部屋だった。

普通はこの部屋を見たら誰でも喜ぶものだが、ミノルは違っていた。

「ダブルベッド、ツインじゃなくて？ハハハ…ん？」

ミノルはベッドの横にある机に一枚の手紙があった。

『ミノル…この手紙を読んでいるということは、マリと一緒に部屋に入ったことだろう。

このロイヤルヘブンズホテルのＶＩＰ専用のロイヤルスイートルームはいつか結ばれる恋人同士が快適に、そして激しく・狂い・快楽を味わうために造ったものだ。

是非ともマリと存分にやってくれ!!

ＰＳ・孫の性別はどれでもいいから期待してるぞ！（笑）

「ふざけんなー（怒）!!あんのヤロー！今度会ったらマジで二度とドッキングできない体にしてやるぅ！」

手紙をビリビリに破いて、ミノルは叫んだ。

すると…

「ミノル様…」

「何？」

ミノルが後ろを振り向くと、そこには背中向きで立っているマリがいた。

「背中のドレスのファスナー開けてください…」

「なっ！」

ミノルは驚いて体が固まってしまった。ミノルの目線ではドレスの間にあるマリの白い肌が見えていた。

「聞いていいか？マリ」

「何でしょう？」

「下は着てるよな？」

「そうですけど…？」

「わかった…今、ファスナー開けるから」

そう言ってミノルはファスナーを掴み、目を閉じてファスナーをおろしてバックステップで後ろに下がり、一瞬でバーカウンターに隠れた。

「あの…何で隠れるんですか？」

「いいじゃんか！シャワー浴びるんならさっさと浴びてきたら!!」

「はい…わかりました」

そう言って彼女はシャワー室に向かった。

「・・・行ったか？」

シャワーの音を確認したミノルが立ち上がって、いろんな種類の酒類を見ていた。

「さすがは酒豪の闇魔だ…色々あるな～おっ!!響の３０年か…ザ・

マッカラン１９４６にホワイトボウモア４３年、バランタイン３０年もいい…迷うぜちきしょー」

かなりレアなウイスキーを前に迷うミノルであった。

一方…合同食事会を終えて、ヤマトは自分の部隊『デストロイジュエルズ』の隊員と飲みつぶれて眠っていて、白いＴシャツに黒いズボン姿でアキラは暗闇の廊下を歩いて、ある場所に向かっていた。

「全員就寝完了してるし（アレを除いて…）温泉でも入って疲れを癒すか…」

そう言ってアキラが入ったのは温泉浴場だった。

「ヤマトの奴、一段と強くなったな…けど、まだまだかな？」

シャツとズボンを脱いで、下にタオルを巻いて浴場に入った。

広い内湯の他にサウナ室も完備しており、目玉なのは外にある大きい露天風呂だった。

騎士団の兵士全員は就寝しているため、誰もいなかった。

「さて…露天でも入るか…」

アキラは扉を開けて露天風呂を見ると、予想以上に露天風呂の面積

が広く、横長に延びていた。

「広い…独占だな」

木製の湯桶にお湯を入れて体を数回濡らし、風呂に入るアキラ。空には満天の星空が見えて、絶景だった。

「しかし無駄に横に広い…湯気で少し見えないけど、泳げるくらいの広さはあるな…」

そう言って浸かりながら移動するアキラ。前は湯気で全く見えず、まるで霧のような濃さだった。

すると湯気が晴れ始めて、視界がよくなった。

「見えてきたな…」

移動を止めてアキラが横を振り向いたら…

「「……」」

そこにはタオルで体を巻いて入っているレオナがいた。

その瞬間、周りが静寂と沈黙となり、そして…

「うわあぁ!?何でレオナが!!」

「それはコッチの台詞です！アキラ様、ここは女湯ですよ!!」

「僕は男湯からこの露天風呂に入っていただけだ…あれ？」

アキラはある事に気がついた。あの時自分が言葉を…

『しかし無駄に横に広い…湯気で少し見えないけど、泳げるくらいの広さはあるな…』

「横に広い…はっ！そういう事か…」

自分が過去に言った言葉を思い出しある事に気がついたアキラ。

「何がですか？」

「ここの露天風呂…混浴だ…」

「混浴!!しかし兵士達が入っていた時にはそういう情報は入っておりませんが!?」

「いや…たぶんこういう遅い時間には混浴になる温泉は少なくない…それに仕切り板もないし、間違いないよ」

そう言ってアキラは彼女の元を離れようとした。

「あの…アキラ様」

「何、僕は今回の事は忘れるから…」

「あの…一緒に入りませんか？」

「はい？」

レオナの疑惑の言葉に耳を疑うアキラ。

「最近私の男嫌いのせいで…部下だけでなく、周りの人たちに迷惑をかけております。だから自分なりに男嫌いを直そうと思い…男の写真・男の映像で男嫌いを克服していき、そして今回の合同演習もその一つです」

「つまり僕に協力を求めると…」

「はい…」

彼女の言葉に少し考えるアキラ。

「わかった…んで何やるの？」

「ありがとうございます…その、横に並ぶようにお願いします」

「わかった…」

そう言ってアキラとレオナは隣同士になって夜空を見た。

「どうだ？少し楽になったか？」

「はい…何とか…（ガクブル）」

アキラの言葉に震えながら答えるレオナだが、徐々にのぼせてきたアキラはそんな様子のレオナなど確認できなかった。

『ヤバイ…のぼせてきた…』

のぼせてきている所為かアキラは考えがぼやけ、レオナの方を見た。

そして…

『ナデナデ…』

「!!!」

のぼせて意識が少し飛んでしまったのかアキラはレオナの頭をナデナデしてしまった。

「何するんですか!!」

「へっ?あ…ゴメン!!ぼーっとして…可愛かったから…」

「私は子供ではありません!!先に上がります」

そう言って彼女が立ち上がったその瞬間。

『ヒラッ』

「えっ…」

「あっ…!!」

立ち上がった瞬間、彼女が身につけていたタオルが落ちて、アキラの前で裸体を見せてしまった。

『もう…私、恥ずかしすぎる!』

心中恥ずかしながら瞬時にタオルで隠して足早と中に入った。

「・・・・・」

彼女の裸を見たアキラはそのまま倒れて、プクプクと泡を出して気を失った。

『鎧でわからなかったけど・・・意外にスタイル良かった』

その後、酔いを醒まそうと温泉に入ってきたヤマトに発見されたという。

一方そんな事は全く知らないミノルは、響３０年を入れたグラスを持って飲んでいた。

「何か…あっという間だな…」

ミノルはマリの事を思い出を振り返っていた。マリが生まれた時に一緒に喜びをわかち合った時、幼いマリと一緒に遊んだ事、マリに勉強を教えた事、様々な思い出がミノルの脳裏に焼きついていた。

「闇魔…俺はマリと言う大事な宝を奪うなんて出来ない…たとえお前とマリがいいと言っても、その宝を奪って傷物にする事なんて、俺にはできない…」

そう言いながらグラスの中にあるウイスキーを飲み干した。

「酔いたい時なのに酔えないなんて、酒豪は本当につらいや…」

そう言って酒をグラスに入れて呑もうとした時だった。

「ミノル様、先にシャワー頂きました」

「ぶっ!?!?」

ミノルが見たものは頭と体にバスタオルを巻いたマリの姿だった。その姿を見たミノルは口に含んでいたウイスキーを噴いて噎（む）せた。

「おまっ！早く着替えろ!!」

「でも…講演会で…」

「って事はワザとか！風邪ひくから、俺がシャワー浴びてる間にここの部屋着に着替えろ!!いいな！」

そう言ってミノルは足早にシャワー室に入って行った。

「まったく…親も親なら子も子だぜ全く…」

シャワーを浴び終わったミノルは、部屋着に着替えて戻った。

「あれ？」

ミノルが戻ると、部屋の電気は消されていて月の光が明かり代わりになっていて部屋にはマリの姿がなかった。

「どこ行ったんだ…」

そう言いながらミノルはベッドの前に立つとそこには布団が妙に隠れるように膨らんでいた。

「バレバレだ！」

そう言ってミノルが掛け布団を捲ると、枕とソファーにあったクッションが置かれていた。

「フェイクか！ハッ!?」

瞬時に後ろを向いたミノルはマリに押され、ベッドに倒された。そして彼女は着ていた部屋着を脱いで、下一枚以外でほぼ裸の状態になった。

「お前！何で!?」

「こうなったら最後の手段です。講習の最後に言った母の言葉、『裸になれば男はイチコロ』を！」

そう言って彼女はじわりじわりとミノルに近づいて目を閉じた。

だが…

「あれ？」

目を開くとそこにはミノルの姿はなかった。そして彼女の横には着ていた部屋着の上一枚を彼女に手渡そうとしているミノルがいた。

「着ないと風邪引くぞ…」

「そんな事はいいです！私は…」

「着ろ…ミノルではく、魔王としての命令だ」

一瞬ミノルは冷たく鋭い目でマリを睨み付け、彼女は少しおびえた様子で彼の上着と着て、自分がさっき着ていたズボンをはいた。

「やっぱり、私がお父様の…親友の娘を傷物にしたくないから…ですか」

「聞いていたのか…」

「・・・・」

無言で頷くマリにミノルはベッドから立ち上がった。

「俺は闇魔の親友、そしてその娘のマリも同じくらいに好きだ」

「それじゃあ…」

「でも俺は、闇魔の宝物であるお前を奪いたくない」

「どうしてですか!?」

「親友の娘を奪って嬉しいわけないだろ！」

「!!」

ミノルの言葉に驚いて下に俯くマリ。

「お前の気持ちは嬉しい…けど俺には闇魔の娘であるお前を…」

「・・・・せん」

「えっ…」

「父は関係ありません！私は閻魔大王の娘ではなく、マリという一人の女性としてどうなのか聞いているんです！」

涙を流しながらマリは必死な思いでミノルに問いかけた。

「一人の女性として…」

突然の事にミノルは戸惑いを隠せなかった。

「あなたはいつも閻魔の娘だから、親友の娘だからと言い訳にして逃げています、それを理由にされて好きな気持ちを踏みにじられる相手の事を考えてください！」

「・・・・・・」

マリの言葉に無言になるミノル。

「そんな事も一つもわからずに好きと言う言葉を簡単に使わないで下さい！」

そう言って彼女は泣きながら部屋を出てエレベーターに乗って、屋上のボタンを押して扉が閉まった。

ミノルは一人、ポツンとベッドの上に座っていた。

「一人の女性として…か」

ミノルはただ、マリの事を好きになる・愛してしまうのが怖かったのかもしれない。

「泣いてたな…あいつ」

ベッドには彼女の涙のあとが数箇所あった。

「クソ！」

歯を食いしばってミノルは部屋を出て、ＶＩＰエレベーターの行き先が屋上で止まっていた。

「屋上か！」

ミノルは隣にある非常階段のドアを開けて、必死に階段を登った。自分達がいた部屋と屋上までは大体１０階近くあった。それでもミノルは必死に階段を上がる。

『何が傷つけたくないだ！結局俺は彼女の心を傷つけて、涙を流させた…最低だ…最低の魔王だチクショー!!』

ようやく屋上に到着し、扉をおもいっきり開けるミノル。

屋上はヘリポートとなっていて、風が少し吹き荒れていた。

「マリ!!」

ヘリポートの上でしゃがんで泣いているマリにミノルは叫んで呼んだ。だがマリはミノルの言葉など全く耳を傾けない。

ミノルは息を少し切らせながらマリに近づくミノル。

「何ですか…ほっといてください」

「こんなところに一人でいるお前をほっとけるか」

「闇魔の娘だからですか？」

「・・・・・・」

「ほっといてください、一人に…」

マリが言いかけたときミノルが彼女の腕を掴んで立ち上がらせた。

「闇魔の娘？違う!!俺はマリという1人の女性として好きだ！お前を愛しているんだ!!」

ミノルの大胆告白に驚きを隠せなかったマリだったが、すぐに落ち着きを取り戻した。

「言葉ではわかりました、とても嬉しいです…けど、口では何とでも言います」

「わかった…お前を傷物にはしない…けど」

「!!!!」

そう言ってミノルは目を閉じてマリにキスをし、彼女は目をカッと開いてビックリした。

「お前の唇を奪う…文句は言わせないからな」

ゆっくりと唇を離したミノルが顔を少し赤らめながらマリに言った。

「ずるいです…いつもあなたは…」

目から涙の滴を溜めて小声で言うマリに、指で滴を取るミノル。

「わかってる…けど、もう一度お前の気持ちを知りたい」

「私は…あなたを…愛しています…」

「俺も…愛してる」

満月と満天の星々をバックに、2人は再び口付けを交わした。

今日も魔界は平和である。

おまけ

部屋に戻ったミノルとマリはベッドの前に立っていたが、ミノルは少し困惑していた。

「やっぱ俺ソファーで寝るよ…」

「ダメです！一緒に寝ましょう？」

「うう…わかったよ…そんな目で見るな、変な事しないからな？お前も変な事するなよ？」

「大丈夫ですよ?ミノル様にそんな度胸がないの知っていますから」

「言わせておけば…ってあぶないあぶない、誘いに乗っかるとおもった」

「ふふふ…」

2人は結局何もないまま隣同士並んで寝た。

翌日、閻魔からしつこいほどの質問攻めされたが、2人は何もないと答えた。

キスのことは2人で初めての秘密だから…

第3話

今日ものどかな朝を迎える魔界中心にそびえ立つ城、魔帝城で珍しく一緒に朝食を食べているミノルとアキラ。

「アキラと一緒に国々の視察？」

「はい…」

ミノルは今日の予定を大臣に聞いてグレープフルーツジュースを口に付けた。

「今日、騎士団の訓練はないのはそういう事だったのか…」

そう言ってサラダのトマトをフォークで刺して口に入れるアキラ。

「確かヤマトは2ヶ月前からデストロイジュエルズの遠征で採掘作業の手伝い行っていたっけ？」

「はい…予定では翌日に帰還する予定です」

大臣の言葉に、ミノルはパンを口にして考えた。

『最近じゃあ滅多に目立った事は起きてないし、俺とアキラを呼び出して何を』

パンを噛みながら心中思ったミノルだった。

「まあ兎に角、行ってみよう？」

「んっ…まあそうだな…」

アキラの言葉にパンを飲み込んでミノルは返事をした。

朝食を終えて、黒い衣装に身に纏ったミノルと逆に白い衣装を纏ったアキラは城の廊下を歩いていた。

「しかし…久しぶりだな、ヤマト無しの国々の訪問は」

「そうだね…考えてみればヤマトとは長い付き合いになるね…」

「魔王の王位継承より前にいたからな…」

ミノルとアキラはヤマトの事を話していると目的地についた。

そこは、戦闘ヘリを停めているヘリポートだった。2人の前には戦闘ヘリ一台が停まっていた。

「ヘリで行くのか？」

「時間短縮のためです」

「場所によるって事？」

「はい、これが行く予定の国のリストです」

2人は大臣からリストを貰ってヘリに乗って、ヘリは2人を乗せて飛び立った。

「最初に行くのは…ビステリア王国か…」

ビステリア王国とは…獣人達が治める王国で魔界では大国のジャンル入る程の力を持つ国である。

「ビステリア王国というとアーサーの国か…」

「アーサー、確かアキラの…」

「うん…騎士団の遠征で王位継承の前で何度か共闘して、王位になってから全然会ってないな…」

「俺は会議くらいで2・3回ぐらいしか会ってないな…」

そう言っている内に、ビステリア王国が見えてきた。城の広場にヘリが着陸し、ミノルとアキラはヘリから降りた。

「ミノル様・アキラ様、アーサー様が待つ王位の間にご案内致します」

臣下の後について行き、城の廊下を歩くと、王位の間の扉の前に到着した。

「開門!!」

王位の間の扉が開き、中に入ると中央の椅子にビステリア王国の国王アーサーとその妻で王妃のミーナが座って出迎えた。

「ようこそビステリア王国へ…久しぶりだな…アキラ殿」

「前よりずっと立派になったな…アーサー」

何年ぶりの再会をしたアーサーとアキラ。

「ミノル殿もわざわざ来ていただいて感謝する」

「いや…こちらも久しぶりだが…」

そう言ってミノルの視線はアーサーからミーナに向いた。

「嫁さんとは初対面だな…」

ミノルはミーナを見るのは初めてであり、アキラはミノルの代理で結婚式に出席してミーナを知っていた。

「初めまして…アーサーの妻でビステリア王国王妃のミーナと申します。以後よろしくお願いします」

「ご丁寧な挨拶ありがとう、私が魔王のミノル、以後お見知りおきを…」

ミーナの丁寧な挨拶にミノルも紳士的丁寧に挨拶で返した。

「さて…本題に入ろうか？何で俺たち2人を呼んだのかを？」

「うむ…今日は親衛隊隊長はいないのか？」

「ヤマト？ヤマトは今日はいない…遠征だけど」

「そうか…」

アキラの言葉に目を閉じて黙るアーサー。

すると、扉が開いてミノルとアキラが振り向くと…そこにはドレス姿で黄金色の毛並みをしている獣人の少女が王室の間に入ってきた。

「紹介しよう、我が娘でビステリア王国の王女（プリンセス）…ライナだ」

「初めましてライナです。ごきげんよう…」

「ミノルだ」

「初めましてアキラです」

ライナの挨拶に二人も返した。

「父の代わりに私がお話します…」

そう言って彼女は目を閉じた。

「あれは…3ヶ月前の事です」

3ヶ月前…

『私は使者達と共に魔界の中心都市、『アルカディア』に視察しに来ました』

『ですが私は初めての国で、私は使者の目を盗んで泊まっていたホテルから抜け出しました』

『でも…見知らぬ場所で私は迷ってしまい、帰ろうとした時でした、柄の悪い方々数人とぶつかってしまって…』

「痛ッてー!!」

彼女とぶつかった男が腕を抑えて大声で膝をついた。

「どうしたんすか兄貴！」

「兄貴！」

周りにいた舎弟数人が兄貴と呼ばれている男に寄って来た。

「折れた！俺の腕が折れたぁ!!」

「しっかりしてください兄貴！」

「えっ…す、すみません！」

「すみませんじゃねえだろゴラァ！」

ライナは兄貴の男に謝るが、舎弟の一人が鋭いメンチを切って彼女を脅した。

「どうしてくれんだ！魔帝騎士団所属している兄貴の腕、複雑骨折してんじゃねえか！」

「どうしてくれんだゴラァ!!」

舎弟の一人が彼女の腕を掴んで引っ張ろうとしたら、黄金色の毛並

みを見られてしまった。

「おっ!?おめえ獣人の女か!!」

そう言って腕を抑えながら兄貴が起き上がって彼女の顔をまじまじと見た。

「やめてください！離してください!!」

「うるせえ！人の姿した犬の分際で歯向かってんじゃねえ!!」

「!!!」

舎弟の一言で彼女はショックを受け、涙を少し流した。

「ちょっと来てもらおうか？ワンちゃん」

そう言ってショックを受けている彼女を男たちが連れて行こうとしたときだった。

きっと自分は辱めを受けて売られるんだと彼女は思ったその時だった。

ガシッ！

突如彼女の腕を掴んでいた舎弟の腕を横から誰かが掴んだのだ。

「少女一人に男が群がって無理やり連れまわそうとするなんて情けないね…」

グラサンをかけていた身長が１８０を超える男が兄貴達に言い

放った。

「何だテメェ！やんのか⁉ってイテテテ！」

舎弟が話している途中で男が腕を強く握り、舎弟から彼女を離し、ライナはヤマトの後ろに隠れた。

「ったく最近のナンパは罵声で女の子を口説くなんて…」

ヤマトがため息混じりで言った。

「このヤローぶっ殺してやる‼」

そう言って舎弟の1人が殴りかかろうとしたが、男の蹴りが舎弟の腹部をクリーンヒットして腹を抱えて苦しんだ。

「こんにゃろ‼」

「やりやがったな⁉」

今度は2人掛かりで男に殴りかかろうとしたが、紙一重に避けて、一人には右ストレート、もう一人に左の掌底を当てた。残りは兄貴と舎弟の2人だけになった。

「やれやれ…んで？どうする」

「ふ、ふざけんな！たかが獣臭い獣人一匹のために…」

「・・・・」

舎弟の一言に彼女はまた泣きそうになった。

その時…

「あんた…自分がなに言っているのかわかってんのか？」

ジリジリと近づく男に兄貴と舎弟は少し震えだした。

「獣人だから何？獣臭いから何？だから何？」

そう言いながら男はついに2人の前にやって来た。

「謝罪を…そして二度とそんな寝言言わないと誓ってください」

「うるせえ!!」

舎弟が男に殴りかかったが、男が突き出した舎弟の拳を簡単に掴んで止めた。

「これが答えですか…」

男は徐々に力を入れ始め、ミシミシと生々しい骨の音が出始め、苦しみ出す舎弟。

「ふん！」

「グベッ!?!?」

男は痛みで隙が出来た舎弟に強烈な溝打ちを当て、悶絶する舎弟はそのまま倒れた。

「やれやれ…所詮は口だけか…」

「動くな！」

男は声がした方を見ると兄貴の男が少女を人質を取ってナイフを向けていた

「短刀を捨てて降伏したら？複雑骨折した腕してる５流大根役者の兄貴さん？」

「う、うるせえ！よくも俺様の部下たちを…それにな！」

そう言ってナイフの刃先を男に向けた。

「俺は魔帝騎士団の未来のエースなんだよ！」

「!!!」

男は兄貴の言葉に驚き、拳を強く握った。

「へぇ～騎士団の？未来の？エース？君が？ｙｏｕが？」

喋りながら歩いて近づく男。

「じゃあ俺の事わかると思うけど？」

「はぁ!?お前のようなデカブツ見たことないわ!!」

「そう…それじゃあ」

そう言って男がサングラスを外した。

「この顔に見覚えがあるよね？」

「あ？……!!!」

男の顔を見て顔を青ざめ震えだした。

「デストロイジュエルズの隊長…って言えばもうわかるよね？」

「あ…あ…」

そう…兄貴はわかったのだ。

デストロイジュエルズの隊長は魔王親衛隊隊長…あの魔王も認めるその存在が今、自分の前にいてしかも自分はその人に刃を向けている。

「3秒待ってやるその間に全員連れて逃げろ？さもなくばお前の骨でいい音色を奏でてやろうか？どんな音がするか楽しみだ～」

「ヒィー！すみません!!」

口は笑っているが目が笑っていない男に兄貴は彼女を離し短刀を捨て、舎弟たちを連れて瞬時に逃げていった。

男は膝をついている彼女を起こした。

「大丈夫？怪我は無い？」

「あっ…」

彼女は男から離れるようにその手を払った。

「私に…近づかないで」

「どうして？」

「私、獣人だから…他の人から見たら可笑しな人種だから」

そう言って顔を隠すように男から離れようとした、その時。

「待って」

男は彼女の腕を掴んで引き寄せて顔を隠しているフードを取った。

「君は可笑しな人種じゃないよ？」

「でも…獣臭いし…」

「全然臭くない…」

「嘘よ…絶対」

「嘘じゃないよ」

男は彼女の頬辺りに手を添えた。

「こんなにも可愛くて綺麗な獣人の君に嘘は言わないよ」

「!!」

微笑みをこぼした男の言葉にライナは顔を赤くして俯いた。

「それじゃあ自分はこれで」

腕時計の時間を見て男は立ち去ろうとした。

「待ってください！お名前は…」

「自分は名乗るほど立派じゃないですから…」

少し笑みをこぼした男は走り去って行った。

その後、彼女を探していた使いに保護された。

「・・・という事があったのです」

少し顔を赤らめてライナは話し終えた。

「ライナの話を聞いて、『背が高くて、体格が良く、ジュエルと名のつく部隊』というキーワードで調べたら…」

「ウチのヤマトだったと」

ミノルの言葉にアーサーは首を縦に振った。

「まあ…確かに背は高いし体格はいいし、ジュエルと名の付く部隊は、ヤマトが隊長のデストロイジュエルズ…」

「ビンゴだな…」

アキラが言うヤマトの特徴にライナの話す男の特徴と合致していた。

「それで？何で呼ばれたんだ？ヤマト本人を呼べばいいのに」

「いや…あなた方にお願いがあって呼んだのだ」

「お願い？」

アーサーは一度深呼吸して立ち上がった。

「是非！ヤマト殿を我が娘ライナの婿になってくれるように頼んできてくれないか！」

「「何だって!?」」

アーサーの発言に2人は声を合わせて驚いた。

「ちょ！それってつまりヤマトを婿に迎えるのか!?」

「ああ！そのつもりだ」

「でも確かビステリア王国は同じ獣人同士しか結婚できないんじゃないのか！」

アキラが言うのは今までのビステリア国は昔からの言い伝えで異人との結婚は原則ダメであるからだ。

「それに私は…彼を、ヤマト殿を次期ビステリア国王に推薦しようと思っている」

「!!」

さらなる衝撃発言に再び驚くミノルとアキラ。

「ヤマトを…次期国王候補に!?」

「一体何故!!」

「うむ…近年それに反発している国民が現れ、いざそれを解除しても我ら獣人を毛嫌いするものがたくさんいる…だが彼は違った。初対面の娘でも獣人である事も全て受け入れるその器の大きさに私は感動した。私の推測だが間違いなく彼は王の素質はあると…そう感じた」

「・・・・・・」

アーサーの言葉に真剣に聞くミノルとアキラ。

「ミノル殿、アキラ殿どうかこの通りだ…」

そう言って椅子から立ち上がって頭を下げるアーサー。

「わかった…けど過大な期待はするなよ…」

「うむ…心得ておるが…」

ミノルの言葉に何故か目線を逸らすアーサーに疑問に思った2人。

「何故に目線を逸らす…」

「実は…私よりも娘がかなりヤマトを溺愛してしまって…今、花嫁修

業を…」

「早っ！気が早すぎだろ！まだ決まってないのにか!!」

ミノルは盛大に突っ込んだ。まだ結婚のけの字も無いのに花嫁修業をするなんて…とミノルは思った。

「昔から言うではありませんか、恋する乙女に制御はムリと…」

「ミーナさん、それを皆は暴走と言うんですよ！恋は盲目とは言うけどそんなもんじゃないよね！」

ミーナの発言にツッコミを入れるアキラ。

「はぁ～ヤマト様にまたお会いしたいです～」

手で頬を抑えながら尻尾を豪快に振るライナ。だがミノルはそんな彼女を見てある質問をぶつけてみた。

「ライナちゃん…もし、もしもだよ？ヤマトの周りに女の子数人いたら…どうする？」

ミノルの質問にピクッと尻尾と体を止めたライナ。

「ちょ！兄さんなんて質問ぶつけてんの!!」

「そうですね…とりあえず…噛み千切って私の栄養分になってもらいますから…」

『『ビクッ!!』』

殺気を放ちながら歯を見せて舌をペロっと見せた。まるで餌に飢えた血肉を求める野獣のような彼女にミノルとアキラは冷や汗を出して体が凍ったように固まった。

「あっ！そういえば…メイドさんアレを」

彼女はメイドに持ってこさせたのはタブレット型のＰＣだった。

「お２人は持ち合わせていますか？」

「ああ…持っているけど」

２人はスーツの内ポケットに入っている小型のタブレットを取り出した。

「私のメールアドレスを送ります、ヤマト様に関しての報告があったらこちらに…」

「ああ…わかった」

「こっちも空メールを送るよ」

お互いのメアドを交換し、タブレットを懐にしまう２人。

「それじゃあ…」

「良い返事待ってますわ！」

これまでにない笑顔に２人は喜びではなく別の物も感じてしまったのだった。

ヘリコプター内

「まさかヤマトの婿入りを説得するとはな…しかも王位付きとは…」

空飛ぶヘリの中でミノルが外の景色を見て喋ると、アキラがある疑問をぶつけてみた。

「兄さん、何であの時彼女のにあんな質問をぶつけた？」

「ああ…だって彼を慕う女って俺達が良く知るあの二人だぞ？」

「あっ…サヤカちゃんとシズカさんか？」

「そう…身内と言う壁をＲＰＧかスティンガーミサイルで破壊して飛び越えるような２人だぞ？」

「何でロケットランチャー関係なのか何となくわかるけど…いつもべったりだから知らない人から見たら恋人同士のようだからね…」

そう言って２人はため息をこぼして、次に向かう国のリストのページを捲る。

「次は…イカロス帝国だよ」

「イカロス帝国って、確かハーピーが治めている国か」

次に向かうのは両腕が巨大な翼の形状をしている顔や胴はほぼ人

間と同じだが、足の形は鳥に近いハーピーという生物が治めている帝国で、場所が断崖絶壁の山々の頂上にあるが、空に関する技術は魔界の中でも一番かもしれないほどの力を持つ国である。

「確か男が少ない国だよな…」

「そう…男は繁殖の礎だ！とか豪語してる女尊男卑の国…」

そう…イカロス帝国は昔、男だけ感染するウイルスが流行し、男の数が絶滅寸前になるという大惨事になった。

現在ワクチンなどのおかげ絶滅だけは免れた、しかし既に時代は女の鳥人『ハーピー』が台頭の国になっており、自然に女尊男卑の国になったと言われる。

しかし近年ハーピーによる誘拐事件が多発しており魔界でも問題になっていたが二ヶ月前から事件が止まったらしい。

「まだ誘拐事件の件があるからな、あんまり気乗りしないな…」

「弱気にならないの…もうすぐだよ」

窓に見えたのは雲の上にある山々の頂上に町と中央の山に大きい城が見えてきた。

ヘリコプターは城の隣にある専用ヘリポートに着陸した。

「お待ちしてました、女王陛下がお待ちしております」

使いの者に案内され女王がいる部屋に到着した。

「ロマネス女王陛下、魔王ミノル様と魔帝騎士団長アキラ様をお連れ

しました」

「よし、入れ」

部屋の中から声がし、扉を開けるとそこには藁で出来た椅子に座っている深紅の大きい翼をしている年齢３０後半か４０前半の女性が堂々と座っていた。

「ようこそ我がイカロス帝国へ…私が女王のロマネスだ」

「魔王ミノル…以後お見知りおきを」

「魔帝騎士団団長アキラ…推参しました」

２人は丁寧に挨拶して、椅子に座った。

「それで…我々2人を呼んだ理由を聞きたい」

真剣な表情で話すアキラ。

「うむ…それは我が娘から話してもらおう…」

「「娘？」」

向こうにあるもう一つの扉が開いて入ってきたのは人間だと１０代後半から２０代くらいの風貌で赤い髪色に赤い翼のハーピーの女性が入ってきた。

「紹介しよう、我が娘でイカロス帝国の皇女のアリーテだ」

「お初にお目にかかります…アリーテです」

ロマネスの紹介されクールな態度でアリーテは2人に挨拶をした。
「初めまして…それで、話とは何だ？」
「うむ…あまりパッとしないものだな？魔王とは…」
「ピクッ」
ミノルの問いに冷たく当たるアリーテに少し眉を寄せるミノル。
「兄さん堪えて（ヒソヒソ）」
「わかってる…（ヒソヒソ）」
そんなミノルを見てアキラが小声で止める。
「隣が魔界最強と言われる魔帝騎士団の団長…外から見ると華奢で女々しいのだな？」
「止めた僕がバカだった…兄さんヤっていい？あの小娘の羽根と肉切り刻んで特製肉片付き羽毛枕作ってプレゼントしてあげるから？」
「欲しくないよそんな世界一グロテスクな枕、ってかお前も止めろって!!目がマジだぞ!?」
そう言って剣に手を伸ばしていかにも剣を抜こうとするアキラを止めるミノル。
「アリーテ、口を慎め…お早くこの2人にお話を」

「はい…あれは二ヶ月前の事だ…私が不覚にも人間の村人達の罠に掛かってしまった事だった…」

二ヶ月前

「やったぞ！ハーピーを捕らえたぞ！」

「これで死んだ息子も喜ぶ！」

罠に掛かったアリーテの前には罠を仕掛けた村人達が歓喜していた。

「貴様ら！こんな事して只で済むと思うな!!」

「黙れ！一族の繁栄のためにとか言って男を誘拐し精力を奪い続けて使えなくなったら殺す貴様らに俺たちの気持ちなんて判るか！」

アリーテの言葉に激怒する村人達の一人が名乗りだした。

「ただ殺すんじゃねえ…そんなに男の精力が欲しいんなら…ぐへへ」

やましい事を言った一人に釣られて数人がアリーテに近づいた。

「じっくり犯してから殺してやる…」

「くっ…」

ジリジリと近づく奴らにアリーテが少しおびえ始めたその時だった。

「あのーお取り込み中すみませーん！」

声がした方に村人達にリュックを背負っている大柄の若い男が尋ねてきていた。

「何やってんですか？こんな所で？」

「あん？お前さん村の奴じゃねえな？お前もやるか？」

「何をですか？」

「今からハーピーをヤる所だ！手伝え!!」

「はーい！」

笑顔で答えた男が村人達の中に割って入ってアリーテの前に立った。

すると男がしゃがんで彼女の顔を覗いた。

「泣いてるんですか？」

「泣いてなど…」

顔を翼で隠して言い返すアリーテ。

「何やってんだ！速くやっちまえ！」

「・・・・・」

すると男が無言でくくり罠をこじ開けるように力で破壊した。

「あんた何やってんだ！」

「何って可哀想だから性根と心が腐った連中の罠を壊しただけで…」

「あんた…ハーピーがどんな奴か知ってんのかい！」

鍬を持ったおばさんが男に言い放った。

「知ってますけど？ただ自分は危険な罠に掛かった彼女を助けた、ハーピーとか関係なく…ね」

「こいつらは俺の息子を攫って数ヵ月後には変死体で発見された！」

「私は兄と弟が…ううっ！」

「うちの息子の亡骸を思い出しただけても…」

村の男と若い女性と鍬をもったおばさんが涙を流しながら男に言った。

「ハーピーたちにわからせるんだ！俺達の屈辱を！」

村の若い男が泣きながら男に叫ぶが…

「ふっ…」

男は村人たちの話を鼻で笑い返した。

「あなた方の言い分は判ったけど…」

男は村の若い男数人の下半身を見る。

「罠に掛かったハーピーを犯そうとした村人が1人でもいたら話しは別ですよ?」

「!?」

男の発言に動揺し始める村人達。

「ぶっちゃけ実は全部見てたんですよ助けようとしたらあなた方が来て、数人が下半身を膨らませて集団強姦しようとした事も…」

「確かに若い馬鹿共はヤラシイ事しようとした、けどハーピーは…それ以上の事をしている!」

「だからハーピーは殺しても構わないと?」

「ああ!そうだ!!」

村人達の言い分を聞いて男は背負っているリュックを下ろして中を漁って取り出したのは救急箱だった。

男は黙ってアリーテが怪我している脚の手当てを始めた。

「あんた!まさかハーピーの味方するのか!?」

「あなた方の話しを聞いて自分の答えはこれです」

そう言って器用に手当てを終える立ち上がる男。

「それに…ハーピーを殺しても死んだ人達は生き返るんですか？喜びながら天から降りてくるんですか？」

近付いて来る男の言葉の問いに村人達は黙り込む。

「それに、例えハーピーを何百何千人殺して天から死んだ人達が甦ったとしてもあなた方はその手で、その姿で出迎えますか？ハーピーの血飛沫を浴びた体で抱き締める事、あなた方に出来ますか？」

「そ…それは」

「それにハーピーは空の国の住人、地面に立っていられるかどうかわからないあなた方より数百倍強いんですよ？掛かるかどうかわからない罠仕掛けて安心しきっている大安売りで買いまくった死亡フラグを持つ村人のあなた方が勝てるわけがない！」

「や…やって見なくちゃわからんだろ！」

「無理無理…勝てっこない、何故ならあんたらの行動はハーピーなら誰でもいいという無計画で無意味な行動…しか見えない」

そう言って村人達の前で右往左往と歩く男。

「ハーピーを捕まえたー折角だから殺す前に集団レ〇プしていこうー女達は見てみぬふりをして、男は奥さん・恋人より気持ちよさそうな体を持つハーピーをレ〇プしてスッキリし、身も心もボロボロになったハーピーをみんなで殺して死んだ人達の墓前でレ〇プの事を伏せて報告し、みんなで喜びを分かち合っう」

「…めてくれ」

「一杯ハーピーを捕獲しよう根絶やしになる位捕獲しよう！そしたら殺し放題〇便器にしてレ〇プし放題、〇み放題、使えなくなった〇便器のハーピーは殺して捨てる。墓前で報告し、レ〇プの事はみんなで黙ってよう！だってみんな判るんだものこんな無駄な事してもハーピーに殺された人達、甦るわけないからな!!」

「止めてくれーーーー!!」

1人の村人が男に殴りかかったが簡単に避けられ、足払いされて転倒した。

「確かにハーピーはあなた方の大事な人を奪って殺した。それは許さない、けどあなた方がやろうとしているのは似た行為に当たる…こんな事して死んで大切な人に会える？会える訳がない！彼らは天国にいる！けどあんたらが行くのは１００％いや１００００００００％地獄行きだ!!そんなにハーピーに会いたくないならとっとと荷物まとめて村から出て行け！」

男は言い終わり、深呼吸して村人達を見る。

「それでもハーピーを殺したいなら私を殺してから殺してください、しかし自分もそれなりに抵抗します…最低でも腕か足の骨を軽く砕きますから…」

男は指を鳴らして村人達に忠告し、村人達は男に恐怖し震え始めた。まるで大蛇に睨まれたカエルのようだった。

「俺…帰る」

「私も…」

「ああ…」

徐々に村人達が肩を落としながら離れていった。

「ふぅ～何とか退いたか」

そう言って男はポケットからペットボトルの水を取り出した。

『好機！』

アリーテは痛みを堪えながら立ち上がり、男を捕獲しようと考えた時だった。

「ハーピーは命の恩人でも襲うのかな？」

「!!」

男はアリーテを見ないで話しかけてきた。実は男はペットボトルだけでなく、小さな手鏡も出していた。そして手鏡を手で挟んで後ろの彼女を見ていたのだ。

「それに無理しちゃだめですよ？辛うじて脚の神経まで傷が届いてないけど、安静にしないと傷が深くなるから…」

「私の事より自分の心配をしないのか？私がその気になればお前を…」

「無理だね…その脚の怪我じゃあ人一人掴むのも難しいからね…」

そう言って男は赤色の発煙筒を取り出して煙りを出した。

「これでよし！」

「おい…」

「ん？」

「私達は…間違えていたのか…」

崖に背中を寄せたアリーテが男に聞いてきた。

「さぁ…自分が間違ってると思ったら間違ってるのかもしれません」

「私は…誘拐して精力をつけるという周りの言われが正しいのだと思っていた…出来るだろうか？その…恋愛というものを…」

顔を下に俯きながらアリーテが話すと男は笑いながらアリーテを見た。

「魅力的で綺麗なあなたなら出来ますよ…」

「!!」

男の言葉にドキッとしたアリーテ。

「ん？」

男が上を見るとアリーテも上を見るとハーピー数羽が飛んでいた。

「それじゃあ自分は、勘違いされるのは御免なんで行きます」

「待て！名前を聞かせてくれ!?礼がしたい！」

立ち去ろうとした男が立ち止まりアリーテに振り向いて微笑んだ。

「そんな大層な事はしてませんよ？それに自分は名乗るほど立派じゃないですから」

そう言って彼は去っていった。

「・・・・・・」

話しが終わるとミノルとアキラはぼーっとした表情だった。

「アリーテの証言で解った事は…身長が高くて怪力の男だという事だ」

「まあ…ウチの親衛隊隊長であるヤマトの特徴だな…」

「身長が高くて若くて怪力の持ち主…うん、間違いないね」

アリーテが言う特徴とヤマトの特徴が一致している事を改めて解った二人。

「あっ！だから2ヵ月前から事件が急激に起こらなくなったのか!?」

「うむ…娘が新たに出した法令によってかなり制限をかけた」

「すごいな…ヤマト」

アキラは戦場ではないヤマトの行動で一つの帝国が動いた事に驚いた。

「その男、ヤマト殿はどこにいるのだ？」

「遠征に行っている…不在だ」

「うむ…本当は本人に言いたいのだが…仕方あるまい」

「「???」」

ロマネスの言葉に疑問を覚える二人にロマネスが立ち上がった。

「ヤマト殿を是非我がイカロス帝国のプリンセスアリーテと結婚し王位を継承して欲しい！」

「「はあぁぁぁぁーーーーーーーーー!!??」」

ロマネスの一言にミノルとアキラが盛大に驚いた。

「ちょ！ちょっと待て!? いきなり言われても！」

「しかも王位継承って!!」

「うむ…では頼みました」

そう言って部屋を出ようとするロマネス。

「ちょっと待ってください！理由を聞きたい!!」

アキラの言葉に立ち止まるロマネス。

「あなた方も耳にしているでしょう…反帝国勢力の事」

「ああ…反帝国勢力アルビオンだろ？」

反帝国勢力アルビオンとは女尊男卑のイカロス帝国に反旗している国で主に男の鳥人で編成している勢力である。

「アルビオンのリーダーは確かカーチスという…」

「カーチスは私の弟である」

「!?」

ミノルとアキラはカーチスはロマネスの弟である事に驚いた。

「公表はしていないが、あいつは我が娘を誘拐を企ていた…」

「なるほど…人質にして国を奪おうとしたのか、俺たちの協力を申請したのは俺名義の誘拐、魔王公認の誘拐が目的か…」

そう、カーチスは一度ミノルがいる魔帝城に訪れ、協力を要請していたのだ。

「わかった…魔王の権限で彼らとの協力は白紙にし、再度面会の時に真実を言わせる」

「すまない…ああ、理由だったな？ヤマトを王位にする理由…」

ロマネスは窓に近づいて、そこに映る街などを見下ろしていた。

「彼の器のでかさだ…彼は絶対的窮地から娘を助け出し…ハーピーの我々を知りながら、嫌わずに受け入れる彼の器に感動した…彼ならこの国を…古くのいわれによって成り立っているこのイカロス帝国を変えると信じている」

「「・・・・・・」」

ロマネスの言葉に黙って真剣に話を聞く2人。

「わかりました…でも期待だけはしないで下さい」

「うむ…わかった」

そう言って何故か目線を逸らすロマネス

「何で目線を逸らす？」

「実は…その、挙式の計画とドレスの候補を…」

「完全に決まった前提ですよね！まだ決まってもないのに!?」

「しかたないだろ！大事な一人娘が結婚するかもしれないのだぞ！親として盛大に…」

「意外と娘に溺愛してるんだな…」

ロマネスの発言につっ込むアキラと呆れるミノル。

「それで…一つ質問があるんだけど…」

『まさか兄さんあの質問を!!』

アキラは内心確信した。ビステリア王国で言ったあの質問を…

「もし…もしもだぞ？アリーテと同じヤマトの事を片想いしている女の子がいたらどう思う？」

「・・・・何？」

ミノルが質問をぶつけたその瞬間、アリーテが鋭い眼でミノルを睨んだ。

「いや！例えだよ！例え！」

「もちろん私のこの脚爪で頭から引き千切って脳を引きずり出す！」

『『想像しちまった…』』

彼女の言葉に青ざめる2人だった。

「2人はタブレットを持っておるか？」

アリーテがどこから出したのかタブレットを取り出した。

「ああ…持ってるけど」

返事をしたミノルとアキラはタブレットを取り出した。

「メアド交換だ…流出はするなよ?」

「解ってるって!」

こうして3人はメアド交換をした。

「うむ!返事を待ってるぞ!!」

その後2人は再びヘリコプターに乗り込み次の国に向かった。

つづく…